

発刊に当たって

この記録誌「東日本大震災津波復興支援の歩み」は、岩手県立大学の東日本大震災津波から10年間の復興支援活動を取りまとめたものです。初動対応から現地でのボランティア活動、教育・研究・地域貢献活動等の取組について、「事実の記録」と「教員、学生の一人ひとりの物語」の二部構成で編纂しました。

あの日、2011年3月11日、何度かの揺れが収まった後、本学は、直ちに被害状況の把握、学生の安否確認に取り掛かりました。特に、通信環境や道路環境が整わない中で、岩手県沿岸部に所在する宮古短期大学の学生の安否確認は、最も急がれる対応でした。被災直後の通常の生活がままならない中、翌12日、13日に実施予定だった一般選抜試験（後期）の中止、卒業式・入学式の中止を決定し、被災学生の入学料・授業料の免除を実施することとしました。また、被災地である宮古市は住まいの確保が困難なため、通学支援として盛岡駅から宮古短期大学部へのバス運行を実施しました。

これら本学の運営に関する対応のほか、被災地の復興支援のための活動も同時並行して進めました。震災から約1か月後の同年4月5日には、「災害復

興支援センター」を設置し、専門性を持つ教員の被災地への派遣支援等を開始しました。また、地域のシンクタンクとして同年4月1日に開設予定であった「地域政策研究センター」に「震災復興研究部門」を設置し、長期的に地域の復興支援に携わっていくこととしました。

学生たちは「岩手県立大学学生ボランティアセンター」を中心に、「風土熱人R」、「いわてGINGA-NET」、「カッキー's」、「復興girls&boys*」等様々な団体が地域のニーズに応えながらボランティア活動を発展させていきました。

震災当時から始まった本学の教員や学生による復興支援活動は、変わりゆく被災地に寄り添いながら、形を変え、時に新しい学生に代替わりをしながら、これまで続けてきたものです。学生や教員が自主的に取り組んだ活動や取組の全てを1冊にまとめることは困難ですが、東日本大震災津波から10年が経過し、震災の風化が語られる今、震災を忘れないという想いとともこの記録誌を作りました。

本記録誌における様々な活動や体験談が、御覧いただいている皆様方の自然災害発生時の対応や、減災・防災活動の一助となれば幸いです。